

イサク ④

□イサクの信仰の手本

1. 土地の約束と子の約束は、アブラハムに復活を確信させることになった。アブラハムは、約束の子イサクを捧げることを通して、復活信仰を表明した。このとき、イサクは30歳代の壮健な青年であったが、父アブラハムに逆らわず、従い通した。
2. 父アブラハムと同様、寄留者の立場を甘んじて受けて、忍耐し続けた。
3. イサクは、双子の息子エサウとヤコブをもうけた。出産のときに神は、アブラハム契約の継承者は弟のヤコブになるという預言を、妻リベカを通して与えていたが、イサクは兄のエサウの方を愛し、エサウを選ぼうとした。しかし、妻リベカと子ヤコブによる偽計事件を受けて、神のみこころに逆らっていた自分の罪に気づき、自ら進んで、確信をもって、未来のことについてヤコブとエサウを祝福した。

□本日の内容： 前回、今回、そして次回の3回に分けて、イサクの信仰の手本第3番です。前回では、双子の兄弟が誕生するときに与えられた預言に照らすと、成長した兄弟に対する父親イサクの態度は、方向性が違っていた、ということを見ました。神のことは「兄は弟に仕える」でしたが、父親イサクは兄エサウが持ってくる「狼の獲物を好んでいたから」、「エサウを愛していた」というのです。

今回は、二つの出来事を見ます。一つは、兄弟間で起きた「長子権の譲渡」。もう一つは、イサクが年老いて兄エサウを祝福しようとしたとき、妻リベカが夫を欺いてでもそれを止めようとした出来事です。

(1) 兄エサウは、弟ヤコブに長子の権利を渡した（創世記 25 章 29～34 節）

- ① さて、ヤコブが煮物を煮ていると、エサウが野から帰って来た。彼は疲れきっていた。エサウはヤコブに言った。「どうか、その赤いのを、その赤い物を食べさせてくれ。疲れきっているのだ。」

原文のニュアンスは、もっと粗野な感じ。「おい、赤いの、その赤いものを俺によこせ、一気にかぶ飲みさせろ」

- ここにはエサウの生き方が表れている。神のこと、永遠のことなどに関心はなく、目先のその時だけを生きている人生。
- ヘブル人への手紙の著者は、エサウを評して「俗悪な者」（ヘブル 12：16）と評している。

- ② するとヤコブは、「今すぐ私に、あなたの長子の権利を売ってください。」と言った。エサウは、「見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になるだろう」と言った。ヤコブが「今すぐ、私に誓ってください」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼は、自分の長子の権利をヤコブに売った。

- 「長子の権利」財産分割では他の兄弟の2倍（申 21：17）
 - さらに、イサクは、アブラハム契約を持っている。その契約の内容は3つの約束、すなわち土地の約束、子孫の約束、そして祝福の約束である。三番目の祝福の約束には、メシアを出す家系になるという霊的な富も含まれる。
 - 弟ヤコブにとって、長子の権利の中心は、霊的な富。しかし、兄エサウは、霊的な富を保持することに関心がなかった。「何になろう」
 - 兄エサウは、弟ヤコブに長子の権利を渡した。
- ③ ヤコブがエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を侮った。
- エサウは、食べたり飲んだりして、立ち去った・・・
原文は4つのステップ：【食べた、飲んだ、立ち上がった、そして去った】
「去った」＝ヤラク「離れる、行く、自分の道に行く」
 - エサウは長子の権利を侮った・・・単に長子権を渡しただけでなく、長子権を「侮った」＝バザー「価値のないものとして扱った、軽蔑した」
- (2) エサウの妻たち（創 26 章 34～35 節）
- ① エサウは四十歳になって、ヒッタイト人ベエリの娘ユディトと、ヒッタイト人エロンの娘バセマテを妻に迎えた。
- エサウ 40 歳で、ヒッタイト人の妻を二人めとった→ここにも、アブラハム契約を受け取るという気持ちが全くない。イサクは 100 歳。
- ② 彼女たちは、イサクとリベカにとって悩みの種となった。
- (3) イサクの意向とリベカによる偽計（創 27 章 1～17 節）
- ① イサクが年をとり、目がかすんでよく見えなくなったときのことである。
- イサクが実際に死去したのは、180 歳。創世記の他の箇所と合わせてみると、このときイサク 137 歳。しかし、視力が衰えてほとんど見えなくなり、死期が近いと感じた。14 年前に死んだ異母兄イシュマエルも享年 137 歳だった。
 - このとき、エサウとヤコブは 77 歳。エサウは 40 歳で結婚したから、それから 37 年。イサクとリベカが、ヒッタイト人の嫁二人を悩みの種として、実に 37 年間に過ぎている。ヤコブは、まだ独身。
- ② 彼は上の息子エサウを呼び寄せて、「わが子よ」と言った。すると彼は「はい、ここにおります」と答えた。イサクは言った。「見なさい。私は年老いて、いつ死ぬかわからない。さあ今、おまえの道具の矢筒と弓を取って野に出て行き、私のために獲物をしとめて来てくれないか。そして私のために、私の好きなおいしい料理を作り、ここに持って来て、私に食べさせてくれ。私が死ぬ前に、私

自ら、おまえを祝福できるように。』

- 「私自ら、おまえを祝福できるように」・・・イサクの意向は、双子の誕生時にリベカに啓示された神のみこころとは違う。
- アブラハム契約を継承する子への祝福を、「私の好きなおいしい料理」と引き換えに与える？ エサウが食べ物で長子の権利を売った軽率さに近い態度を感じるが、食べ物と飲み物を受け取って祝福を与える儀式的習わしが古代にあったことも事実。

③ リベカは聞いていた

リベカは、イサクがその子エサウに話しているのを聞いていた。それで、エサウが獲物をしとめて父のところに持って来ようと野に出かけたとき、(リベカは急いでヤコブを呼び寄せた)

④ リベカの決断

リベカは息子のヤコブに言った。「今私は、父上があなたの兄エサウにこう言っておられるのを聞きました。『獲物を捕って来て、私においしい料理を作ってくれ。たべて、死ぬ前に、主の前でおまえを祝福しよう。』

さあ今、子よ。私が命じることを、よく聞きなさい。

さあ、群れのところに行って、そこから最上の子やぎを二匹取って私のところに来なさい。私はそれで、あなたの父上の好きな、おいしい料理を作りましょう。あなたが父上のところに持って行けば、食べて、死ぬ前にあなたを祝福してくださるでしょう。」

⑤ ヤコブの心配

ヤコブは母リベカに言った。「でも、兄さんのエサウは毛深い人なのに、私の肌は滑らかです。もしかすると父上は私にさわって、私にからかわれたと思うでしょう。私は祝福どころか、のろいをこの身に招くことになります。」

母は彼に言った。「子よ。あなたへののろいは私の身にあるように。ただ私の言うことをよく聞いて、行って子やぎを取って来なさい。」

⑥ 偽計の準備

それでヤコブは行って、取って母のところに持って来た。母は、父の好む、おいしい料理を作った。それからリベカは、家の中で自分の手もとにあった、上の息子エサウの衣を取って来て、それを下の息子ヤコブに着せ、また、子やぎの毛皮を、彼の両腕と、首の滑らかなところに巻き付けた。そうして、自分が作ったおいしい料理とパンを、息子ヤコブの手に渡した。

リベカによる偽計は、どうなるのでしょうか。次回は、妻リベカと子ヤコブによる偽計事件を受けて、イサクが神のみこころに逆らっていた自分の罪に気づき、自ら進んで、確信をもって、未来のことについてヤコブとエサウを祝福した出来事です。